

くまにち 論壇



国連事務次長・
軍縮担当上級代表

中満 泉

なかみつ・いずみ 89年国連入りし、難民、人道支援や安全保障に従事。著書「危機の現場に立つ」。ニューヨーク市在住。59歳。

人類の未来を私のDNAを育んだ熊本と考えたい。やや肩に力を入れたそんな思いで2021年に始めたこのコラムは今回が最終回。ほんの2年前に比べても世界は大きく変わったが、締めくくりに今日はあらためて「未来」のことを考えよう。

人口動態やGDP、競争力、賃金指数など様々な経済データを見る限り、日本は国際的な地位を急速に失い、衰退に向かいつつあるとの分析結果が明白だ。実際、幾つもの意識調査は、日本人が将来について実に悲観的であることを示している。日本財団が22年、18歳を対象に実施した国や社会に対する意識調査の6カ国比較では、自国の将来に関する全質問で日本は最下位である。日本の将来が今より良くなると考える若者は13・9%、経済競争力が強くなると考えるのは10・9%しかない。急激な少子高齢化、経済や賃金の停滞、激変する安全保障環境という現実の中、高度成長期の過去にとらわれ、政策や戦略を根本的に変えられないために、現状からの出口が見いだせず、若者は未来に夢と希望を持たずにいる。調査では社会参加度も各国に比べて低く、諦め感に支配されている傾向さえ見える。この悪循環をどう断ち切ったら良いのか。

「あるべき未来」を創造する

私は、答えは「未来を考えること」だと思っている。正確に言えば「どんな未来にしたいのかを考えること」だ。もちろん未来には多くの不確実性があり、簡単に予測できるものではない。現在のような歴史の転換期ではなおさらだ。社会経済の激変や地政学的な地殻変動以外にも、人工知能(AI)、量子コンピューター、合成生物学などの新興科学技術は人類社会を根本から変えるだろうが、具体的にどんなインパクトがあるのかは予測が難しい。

このような想定できない大きな変化に備えるために、多くの政府や民間企業が「フォアサイト(未来洞察)活動」という手法を取り入れている。国連でも近年このアプローチを取り入れ、私の率いる軍縮部でも未来分析を進めている。

フォアサイトとはいわば、「こうありたい未来像」を想定し、そこから逆算して現在なすべき行動を組み立てていく手法だ。現在入手可能なデータや質的情報を幅広くスキャンし分析した上で、未来のシナリオを考え議論する。そのプロセスに多様な人々関わる。専門家だけでなく、立場の異なる関係者間の議論が、「未来の芽」ともいえる未知の発想に気づききっかけを生み出す。

分析の過程では、何も行動せず現在の延長上に出現するであろうシナリオを含め、複数の未来が見えてくる。と同時に、ありたい未来像にできるだけ近いシナリオを達成するためには何をすれば良いのかも明らかになっていく。つまり未来を「予測」するというより、目指すべき未来像を「創造」することが主眼とされる。

困難な時代こそ、人々を團結させる夢と希望を持つことが歴史の流れを変えていくのか。日本は歴史の不確実性を身をもって体現した国でもある。第2次世界大戦で焼け野原になった日本が、1968年には世界第2位の経済大国になると誰が予測しただろう。敗北し貧困国となっても、いつか国際社会の尊敬を勝ち得る豊かな平和大国になるといつビジョンが広く人々に共有され、それが社会を牽引したのではないか。

今、再び大きな歴史の転換期にある中で、50年後、100年後にどのような日本でありたいのかを考えるべきだ。お決まりの、ほとんどが中高年男性の「有識者」の議論ではなく、幅広い国民が参加して。過去と現在にとらわれた苦渋の改革案ではなく、ありたい未来を創るために。

国際社会も同じだ。分断と対立が深まり、国際秩序への挑戦を目の当たりにする現在の視点からの議論はとてつもない困難が伴う。しかし、新たな可能性の利益を共有し、未来の人類が平和に共存し繁栄を続けるのか、それとも対立を拡大させ破壊のリスクを産むのか。前者があるべき未来像なら、そのために今からなすべきことは山ほどある。国連は2024年、それらを議論する「未来サミット」を主催する。子どもや孫、そのまた孫たちの未来を少しでもより良いものにするために。